

---

# 親友

石ころ

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

親友

### 【Nコード】

N2846B

### 【作者名】

石ころ

### 【あらすじ】

家を出て、独りで安アパートに住む青年。そこに大学時代の友人が訪れる。

「よう」

インターホンを鳴らされたので、玄関に行きドアを開けてみると、そこには昔の友人である松永がいた。

「えっと……久しぶり」

なんと言えばよいのか分からなかったので、とりあえず当たり障りのない返事をした。その次の言葉を考えていると、

「失礼するぜ」

それだけ言って、彼ははずかすかと我が家に入り込んできた。

「おい……」

俺の制止の声も聞かず、侵入者は玄関で靴を脱ぐと、四畳半の狭い室内に足を踏み入れた。俺は困惑していると、「いやあ、なんとも貧乏くさい部屋だ」と松永は感慨深げに腕組みを言った。俺は怒るというよりも呆れて、ため息を一つつくると迷惑そうな声で訊いた。

「いきなりなんの用だ？」

「ああ」と、そこで忘れていたかのように松永は言った。「今、一文なしなんだ。晩飯おごってくれよ」

「帰れ」

「おいおい、つれねえな。親友だろ？」

「二年も会ってなかったのに、今いきなり親友だろって頼りにくるな」

「よし、じゃあ今からまた親友になろうぜ！」

風を切る音だけが聞こえた。

俺のストレートを、松永は上体をひねって難なくかわしたのだ。

「なんだ、鈍ってなかったか」

俺がにやっと笑うと、やつも同じ表情をする。

「だから親友だと言っただろ？」

俺と松永は、大学を出てから急速に会う回数が減った。家は近かったが、二人とも働くようになって一年もすると、完全に関係が途絶えた。俺はその時から、もう会わないだろうな、と思っていた。そのはずなのに、こいつはそれから二年も経ってから、俺の家を訪ねてきた。いや、訪問というよりも無理やりの侵入だったけど。久しぶりの再会で、俺はちょっと郷愁というやつに駆られて、仕事はどうだ、女はできたか、などいろいろと話をしたくなったのだが、とりあえず一番気になっていることを最初に訊くことにした。「で、なんで金がないんだ？俺と同じようなところに住んでいるくせに、給料もらってたらむしろ余裕あんだろ」

「競馬ですったから」  
俺は渾身の右フックを松永に放った。それをやつは咄嗟に左手で受ける。がしっ、とコブシを掴まれた。

甘いな、俺は薄い笑みを浮かべた。松永が驚愕の顔をして崩れ落ちた。俺がフックから一刹那だけ遅れさせて繰り出した左足のローキックを、もろに受けたからだ。俺は松永の腹の上に乗りがかった。これで俺の勝利は確定した。

さっと、コブシを振り上げる。  
「ま、待った！待ってくれ、吉川くん！」  
「なんだ？今更、命乞いか？」  
「あれはジョークだよ。ジョーク」

「……………」  
俺は疑いの視線を送りつつも、松永から離れた。彼は「ふう……………」と立ち上がると、苦笑を浮かべながら言った。

「いや実はな、仕事を辞めたんだ」  
「……………はあ？」  
「一週間前にな」

それで金が尽きて、俺のところへやってきたのか。彼がここに来たことに納得しかけたが、俺はそもそもの疑問を口にした。  
「というか、なんで辞めたんだ？」

「それがな、いきなりお偉方に呼び出されたかと思うと、君は明日から来なくていいよって言われてな。まいった、まいった」

「それは世間一般ではクビと言う」

「そうなのか!? 知らなかった……」

松永は「初耳だ」と言わんばかりに驚いてみせた。呆れを通り越して、尊敬してしまうほどポジティブな野郎だ。どうやら昔と変わっていないようだ。

それにしても、なにやらかしたんだこいつは……。

「まあそんなわけで、なにかおごってくれよ」

と言つて、まるで自分が家の主であるかのようにあぐらをかいて、ちゃぶ台の前に座った。殴り殺してやるうかこいつは、と殺意が一瞬芽生えた。

「……まったく」俺はやれやれと首を振った。「カップラーメンぐらいならいいが」

「カ、カップラーメン!? 白いご飯と焼き魚と味噌汁じゃないのか!?」

「さあ、ベランダから飛び降りてお帰りください」

俺が松永をベランダへ押しやると、「カップラーメンでいいです、吉川さん」とおとなしくなった。よし、それでいい。俺は満足気な笑みを浮かべた。

「お前、親とは?」

俺がカップラーメンにお湯を淹れていると、ふと松永が訊いた。俺はカップの内側の線まで淹れると、ポットをとめてフタをした。もう一つのカップラーメンも同じようにしながら、俺は松永の問いに答えた。

「……会ってないな」

「会えるときに、会つとけよ」

一瞬、松永が寂しそうな顔をした。が、すぐにスマイルに戻る。彼がそんなことを言う理由を、俺は知っている。

松永には、親がいない。

彼は小さいころ、両親が離婚した。そして引き取られた、母親に父親がいなくても、いや、いなかったからこそ、彼はしっかりと成長した。母親の苦勞を知っていたのだ。

「俺はいつか、でっかくなつて母さんを楽させてやるんだ」

そんなことを、かつて言っていた。だが、その夢は叶わなかった。でっかくなれなかった、からではない。母親が、交通事故で亡くなつてしまつたからだ。

大学を卒業する前だった。

労しかった。そうとう辛いはずだつたらう。しかし、彼は最初こそ落ち込んでいたが、すぐにいつも通りの明るさを取り戻していった。

「きつと俺がしょぼくれている姿なんて、見たくないだろうから」  
そう彼は言っていた。

だからこそだ。だからこそ、松永は俺に言っている。

わかつてはいるのだ、それは。

だけれども、俺はどうしてもそういう気にはなれなかった。

大丈夫さ、そんなことは簡単に起こらない。心の奥底で、そんな思いが残っているからだろ。それに加え、俺は親父と仲が悪かった。家業を継がなかった俺を、親父は「不肖者めッ！」と罵つた。俺は「選ぶ権利は俺にもある！」と家を飛び出した。

俺のこと、今頃どう思っているんだろうか。

「できたぞ」

俺はちやぶ台に二つのカップラーメンを置き、松永と向かい合つて座つた。二人で使うとなると少し狭いが、まあ我慢しよう。「おう、ありがとな！」と松永が清々しい笑顔を見せて、割り箸を割いてつまそうに食いはじめた。俺も彼に続いて、カップに手をつける。俺には家に遊びにくるような友達もいない。もちろん彼女なんかも。だから久しぶりの、誰かと一緒の食事。と言つてもカップラーメンだが。となつた。

不思議だつた。

俺は安上がりなカップラーメンをよく食べる。まずいとは思わないが、うまいとも思わなかった。腹が満たせればそれでいい、そんなことを考えながら食っていた。

今日は、違った。

いつもと同じ種類のものなのに、なにか特別な調味料を入れているわけでもないのに、なぜだかおいしく感じられた。馬鹿なことを話し合いながら、小さなちゃぶ台を二人で分けあって、笑顔で食べる食事は、とても美味だった。

「ごちそうさまでした」

松永が俺に軽く頭を下げる。

「どうするんだ、これから」

俺は親友を心配して訊いた。

「まずはバイトをして、それから新しい職探し、だな」

「そうか」

別にそんなつもりはなかったのに、

「また、やばいときは来るがいいさ。カップラーメンだがな」

そんな言葉が、口を衝いて出た。そして笑みを浮かべている自分に気が付いた。

「ああ、ありがとな」

彼は満面の笑顔を浮かべながら礼を言った。

俺は慌てて、付け加えた。

「ただし、金に余裕ができれば、なんかおこれ」

「そんなこつたるうと思つたぜ」

松永は笑顔を苦笑に変えた。俺は「出世払いというやつだ」と笑った。

「それじゃ、またな」

そう言つて、彼は我が家から去つていった。振り返りはしなかった。また会えるから、だからなのだろうか。

「ああ、またな……」

もう聞こえないだろうけれども、アパートを出てすでに道路にい

親友

る親友に向かつて、俺は眩いた。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2846b/>

---

親友

2008年11月7日07時30分発行

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。